ニュース・レター NO17

2014年8月号

おやじ日本

残暑お見舞い申し上げます。

認定NPO法人おやじ日本
理事長　竹花　豊

6月29日に開催したおやじ日本の第12回全国大会は、500名に上る参加者を得て、盛会のうちに終わりました。東北や神戸の被災地の方々をはじめパネラーの皆さんのお話は、参加者に感銘を与えてくれました。私も勉強になりました。また、素晴らしい音楽で大会を盛り上げて下さいました関係の方々にも感謝申し上げます。今回のニュースレターは大会報告が主です。是非ご覧ください。

おやじ日本は防災問題に今後も取り組んでいきますので、ご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

次回以降の大会に向けて、スマホ問題やオリンピックに向けて父親は今何に取り組むべきかしっかり考えたいと思っています。少しぐらい景気が良くなってきたからと言って子育てまで気が緩んでよい状況にはありません。子どもたちが生きるこれからの社会は甘いものとは思えません。

子どもたちがしっかり準備できるように、何かに取り組むことは全ての大人の責任です。未来教室を含め、私達も微力でもよい、風を吹かし続けたいと思っています。

皆さんには、これからも宜しくお願い申し上げます。

平成26年通常総会、無事終了

6月29日（日）午前10時より、大会会場の渋谷区文化総合センター大和田にて、平成26年度通常総会が開催されました。

総会では、議長に二村好彦副理事長を選出後、平成25年度事業報告、収支決算及び監査報告、監事の選任ついて審議が行われ、全ての議案が可決されました。

なお、監事として長坂敏史監事が再任され、新理事として布村幸彦正会員を第1回定例理事会において選任したことが報告されました。

審議事項
- 平成25年度事業報告について
- 平成25年度収支決算報告について
- 監事の選任について

報告事項
- 平成26年度事業計画について
- 平成26年度予算について
- 理事について
- 事務局職員について

↑再任された
長坂敏史監事

布村幸彦新理事より

おやじ日本の創立以来、全国大会、懇親会に参加。今後理事としてより幅広く取り組みます。文部科学省おやじの会では、子育て支援や手作り弁当等のフォーラムを開催。東京五輪組織委員会にて、全国のおやじの会のご支援で全日本の大会を目指します。

多くの皆さまのご参加、ありがとうございました！

↑二村好彦大会実行委員長

第12回を迎えた全国大会は、6月29日（日）午後1時25分より、渋谷区文化総合センター大和田さくらホールにて開催。500名を超える参加を得て、「災害国日本の親、おやじに問われていること～助けられる人から助ける人へ～」をテーマに基調講演、パネルディスカッションを行いました。（2～8ページに大会報告掲載）

＊＊＊＊＊＊＊

来年も是非ご参加下さい。第13回全国大会では、スマホ問題を。

日時：平成27年6月28日（日）午後　場所：渋谷区内（予定）

第12回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
「災害国日本の親、おやじに問われていること～助けられる人から助ける人へ～」
【基調講演】(要約)小野寺隆成氏(南三陸教育事務所在学青少年育成員・前気仙沼市立階上中学校校長)

私からは防災活動において大人を動かした中学生の地域防災の推進についてお話しします。93名が犠牲になった気仙沼市階上校区では約67%の家屋が津波によって被災し208名の尊い命を奪われました。私はがれきだらけの景色だけではなく、学校で避難生活を続けている多くの人たちの悲惨な現実を目の当たりにしながら、二度とこのような悲惨な状況を繰り返さないために、どうすべきかということを考えなければならないと思うようになりました。

被災者からいろいろ話を聞いて、災害の歴史や大自然の力を甘く見ることは本当に恐ろしいことだ、それから災害を正しく理解した上で備えること、そして訓練することの大切さを実感しました。そこで「知る」「備える」「行動する」という視点で学校を拠点とした防災教育を地区全体で推進していこうと考えました。いつ起こるかわからない災害に対して学校だけでいかに防災教育に力を入れたとしても不十分です。自助力を高める取り組みをベースとして、最も重要視したのが、地域との共助体制づくりでした。

階上中学校では平成17年から一部の人や学区内の行政機関の代表者等を交えて防災教育を実施していましたが、いつの間にか学校中心の防災活動になっていました。そこで私は地区振興会や自治連合会の会長さんをはじめ階上地区でリーダーと言われている方々と一緒に、これまでの防災教育の推進状況や震災から学んだ教訓等を交えて中学校を拠点とした階上地区全体の防災訓練を提案しました。そして三十数名に防災推進委員になっていただき、その後実際に避難活動を想定して細かいことまで話し合いを何度も繰り返しました。そして地域全体での総合防災訓練の実施につなげることができました。

当日は約700名が参加しました。土曜日でしたが、いわゆる働き手といわれるお父さん方の参加が少なかったのが残念でした。しかし地区をまたがった防災訓練を実施できたことで地域全体の防災意識が高まり、自治会ごとの避難訓練や備蓄庫の整備などさまざまな活動が行われるようになりました。

もう一つ、生徒が学校にいたときに地震が発生した場合を想定した訓練です。震災直後、中学生はいろいろ働いてくれましたが、学校が避難所になるという想定で訓練をしていませんでした。余震も続き、新たな地震でいつまた災害が発生して被災者がどっと押しかけるかわからないということで避難所初期対応訓練、設営訓練を実施しました。これは生徒会のリーダーに私の構想を説明し、あとはすべて任せました。子どもたちはかなり悩んだようですが、震災の経験もあり、子どもたちなりにさまざまな場面を想定して役割を分担して、私の想定以上の訓練を見事にやり遂げました。この動きが12月7日の地震のあとに出た津波警報発令時に大いに役立ちました。また各地区での日ごろの訓練が活きて、皆さん冷静に行動できたそうです。日ごろの訓練がいかに大切かを実感させられた部分もありました。

話は変わりますが、先日新聞に公立小中学の耐震工事が財政困難や入札不調のために進んでいないという文部科学省からの発表が載っていました。災害はいつどこで発生しだれを犠牲にするかだれにもわかりません。自分は大丈夫という正常化の偏見、あるいは楽観バイアスといわれる状態は最も危険であるということは、もうすでに東日本大震災でも証明されています。訓練は単なるイベントでもありません。自分や大切な家族、あるいは周囲の人たちの命を守るための大事な取り組みです。また一度やったからいいというものでもありません。やってみると頭の中で考えたとおりにはなかなかいきません。やるたびに課題も出てきます。訓練を何度も繰り返すことが安心安全につながるものなのです。

仕事が忙しい、ほかにやることがあるからといって、子どもたちやお年寄りだけに任せていいのでしょうか。階上地区では一生懸命防災の取組みを続けてきた中学生の姿を見て、大人が本気になって取り組むようになりつつあります。人間は自然災害から逃れることはできません。さまざまな天災に備え、災害国日本に住んでいる一人ひとりが防災意識を高めながら生活していくためにも、いまこそおやじ世代の人たちがリーダーシップを発揮して、本気になって自助、共助への取組みを始めるべきなのです。

【基調講演】(要約)金芳外城雄氏(NPO法人神戸の絆2005専務理事)

阪神淡路大震災からまもなく20年、あの大災害で学んだことを10項目で挙げておやじ10則としました。まさしく、崩壊からの出発というのが私たちの歩みでした。

(1)自立と共生　これは宮城県の看護協会が東北で次々と開いていったものですが、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授が大震災で私たちは何を学んだのかという世界の学生と話した記事の中で、日本人が見せたあの秩序と礼節はすばらしい。日本の底力だと世界の学生も感心していたという指摘が私には非常に印象に残っています。これはその一つの風景です。

(2)迅速・具体的に　巨大災害が問うているものは防災だけではない。人生の危機に遭遇したときに、それこそ親父の行動が問われている。それは迅速な行動、具体的な対処、情報を共有してみんなで力を合わせてやっていく。したがってこうした巨大災害なり人生の危機に際して知性だけでは乗り越えられない。それは行動が伴うからこそおやじとしての価値を発揮するのです。
(3)防災福祉コミュニティ　BOKOMI　神戸で小学校を中心に防災福祉コミュニティ、いま191地区で結成され活動しています。防災だけでは人が集まらないし、忘れがちになるので、高齢化社会の福祉、災害弱者の問題も含めています。これは東南アジアでもBOKOMIとして国際語になりつつあります。
(4)社会関係資本の充実　これもこうした人のつながりというので文藝春秋の 5 月号、「日本の長寿はもう続かない」という記事でイチロー・カワタ教授がソーシャルキャピタル、要するに人的ネットワークや信頼といったものが健康や寿命に大きな影響を与える、すなわちソーシャルキャピタルのある国は非常に健康であり、寿命も長い。横のつながりが薄くなったところは、健康にも寿命にも影響してくる。長寿大国日本を維持するには、富の再配分、教育への投資、格差問題への取り組みが重要だと指摘されています。
(5)生活再建　神戸市の生活再建本部長をしていたのですが、崩壊した街の再生には、「医療・福祉・住宅」が必要で、住宅に加えて働く場所の確保や医療福祉が大事だということで取り組んできました。私は東北の復興は日本の未来がかかっていると思いますが、こうした生活再建を縦横斜めで東北の皆さんが息長く、時間がかかってもやっていくべきだろうと思います。
(6)新しい公共　国、自治体だけではなく、新しい公共と言いますか、公共セクター、市民セクター、そして民間セクターという形でみんなが力を合わせていく。そうでないと巨大災害は乗りきれないと思います。
(7)試験の実施　そういうことを私ども NPO としては、これを身に付けていただこうと、言いっぱなし、聞きっぱなしではなしに、減災検定試験をやってみようということで去年から減災検定試験を実施しています。
(8)国難に備える　これからの巨大災害を国難としてとらえ、単に防災ということではなしに、首都直下型地震や南海トラフ巨大災害に備えるためには個人が活動をする勇気のある民主主義社会にならないといけない。これはおやじに置き換えてもいいと思うのですが、単なる知識、知性だけではなしに行動もするおやじの勇気ある行動が問われているように思います。
(9)神戸はいま20年　おかげさまで神戸は20年を間もなく迎えようとして、新しい総合的な挑戦が進んでいます。その中にはもちろん超高齢化社会への対応もありますし、南海トラフ、巨大災害への備えも欠かせません。この鉄人 28 号は新長田駅前に18メートルの大きさでつくったものですが、すでに観光客を500万人以上集めており神戸復興のシンボルの一つです。
(10)強く優しく　これは私がいつも言うのですが、作家レイモンド・チャンドラーの言葉で、「強くなければ生きていけない。しかし優しくなければ生きている資格がない。」という言葉が、私は防災、あるいは減災というときにこれからの対応でおやじに求められていることではないかと思います。

【パネルディスカッション】

コーディネーター　早川　信夫氏(NHK解説委員)
アシスタント・コーディネーター　竹花　豊(おやじ日本理事長・東京都教育委員)
パネリスト　小野寺　隆成氏(南三陸教育事務所在学青少年育成員・前気仙沼市立階上中学校校長)
金芳　外城雄氏(NPO法人神戸の絆2005専務理事)
保田　真理氏(東北大学災害科学国際研究所助手　防災士)
山中　昌彦氏(渋谷区危機管理対策部防災計画課長)
佐藤　遥子氏(慶應義塾大学生　宮城県南三陸町出身)
楠本　岳志(農林水産省北陸農政局地質官技術士(応用理学部門)金沢市在住　おやじ日本防災担当)
寺澤　恵太郎(元陸上自衛隊隊長　防災士　おやじ日本防災担当)
スカイプ出演者　今野　勝美氏(気仙沼市立階上中学校校長)
宮城県気仙沼市立階上中学校卒業生、在校生
柏　隼人君　畠山　大成君　吉田　菜々さん　三浦　優花さん

早川　まずパネリストの自己紹介をかねて、今日の視点をお話しいただきます。そして宮城県気仙沼市立階上中学校とインターネットで中継がつながっています。震災経験を通して得られたことをお話しいただこうと思います。途中、会場アンケートを行い、次にパネリストからそれぞれの経験を通して災害からどう身を守ったのか、そしてどう守れるのかといったことをお話しいただき、それについて意見交換をしようと思います。その上で、家庭でできること、地域でできることは何なのかを会場の皆様とともに考え、議論をしていきたいと思います。

では「災害国日本の親、おやじに問われていること」を議論するに当たってのそれぞれの今日の視点をコンパクトに提示していただきたいと思います。

保田　仕事柄、大震災直後から現地を回り調査に入りました。実際にお話を聞かせていただき、家族を亡くされた方の悲しみはとても深く、なかなか前を向けないことを知りました。宮城県は地震も多くいままでもいろいろなことをやっていましたが、末端

までの意識の普及ができていなかったことをすごく反省しています。

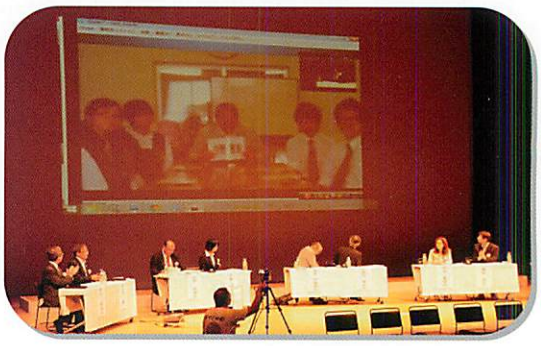
子どもたちにはすごく力があります。本来持っている知ろうとする力、判断しようとする力、行動しようとする力、それをいままでの教育で実際に伸ばしてこられたのかという疑問を持ちます。それをこれからはしっかり伸ばしていこうといま活動しています。

佐藤 私は3・11のとき出身地の南三陸町で被災しました。若者の視点から、若者ができること、震災後に活動してきたことをいくつか紹介し、大人に伝えたいと思います。

楠本 主な担当は地質、特に地滑りです。災害があると呼ばれて行きますが、住んでいる方にこそ、その土地ではどんな時にどういう災害が起こりやすいのかを一番知っていていただきたいというところを今日はお話ししたいと思います。

山中 いま渋谷区の防災課では地域防災力の強化に取り組んでいます。震災に強いまちづくり、災害対策本部の早期の立ち上げと機能の強化、そして帰宅困難者対策など地道な活動が大切だと思います。ただ地域の防災訓練をするときに、若い父親の参加がまだまだ少ないという現実があります。

寺澤 本日は現地でいろいろな経験をされた方々の生の声を伺って防災士として地域防災対策の今後の活動に活かしたいと思います。



早川 今日は気仙沼市の階上中学校の皆さんとインターネットでつながっています。

竹花 東日本大震災のときはどんな様子だったのでしょうか。

今野(校長) 階上中学校は海岸線から約 1.5 キロ、海抜約 31 メートルにあり、震災で激しい揺れを感じたが校舎は大丈夫で、津波被害も免れました。その後学校は被災者の避難所となりました。

畠山 震災が起きた時は、中学校の体育館にいました。長い揺れにびっくりしました。その後校舎の 3 階に避難して、津波が襲ってくる様子を見ました。

竹花 学校でしっかりと震災後、助ける人になったと聞きましたが。

畠山 雪が降って寒い日だったので、避難してきた人たちに自分たちの運動着や毛布などを配りました。そのあとも生徒のみんなが自主的に登校してきて、みんなで相談して活動しました。

柏 小学校が一時避難所になって、中学生の皆さんが積極的に誘導などをしてくれたのでパニックにならなくて済んだと思います。

吉田 先輩方に聞いて動きました。

三浦 自分では何もできなかったが、中学生の先輩方の指示で動きました。

竹花 会場に集まった大人に言いたいことはありますか。

畠山 震災が起きた当時自分たちは防災教育を通じて地震のあと津波が来ることは知っていたが、自分の家族は災害知識が高いとは言えない状況でした。災害に対する知識をみんながもっと持っていたらよかったと思います。

柏 今回の震災でとてもつらい経験をしましたが、避難所でみんなが思いやりの気持ちを持って助け合ったことはこれからも活かしていきたい。避難所の階上中学校では中学生たちが積極的に誘導してくれましたし、大人たちもご飯をつくってくれたりしました。

吉田 震災後に鎌倉市の中学校と交流しましたが、そのときに「ストップ・ザ・無関心」という言葉が出てきて、私たちが語り継いでいかなければいけないと改めて感じました。

三浦 震災が起きたときのために事前に家族で話し合って準備しておくことが大切だと思いました。

竹花 震災が起こる前に、両親と震災が起こったときの避難場所、連絡方法、被害を小さくするための準備などしっかりと話し合っていましたか。

畠山 震災当時中学1年生で、防災学習の地域の防災マップを家族の目につくところに貼って、地域の危険個所を確認したりしていました。地震が起こったときは高台に避難するように家族で決めていました。

柏 家族で高台の避難場所は決めていました。でもそこも被害に遭いました。両親とは震災前にあまり話をしていませんでした。

吉田 私は小学校の校庭を避難場所に決めていました。

三浦 私は震災前に家族と何かあったら、中学校に集まることを決めていました。

竹花 津波のときにはとにかく家にいてはだめ、高いところに避難すると家族と話をしていましたか。家を流された人はどうでしたか。

畠山 震災の時家にいた母は妹や弟を迎えに行って階上中学校に避難してきましたが、もしみんなが家にいて津波が来たら、犠牲者が出た高台に避難していたかもしれません。

今野 防災教育を平成 17 年から実施していましたが、実際に震災を経験していろいろな課題が出てきました。地域防災教育を継続していくことが必要ではないかと思っています。

竹花 皆さん、震災の厳しい経験を糧に、ますます成長していってほしいと思います。

早川 いまの生徒たちの話を聞いて、ボールは大人たちに投げられたと感じました。特に家族の中で話し合いをしていても、やれなかったのは大人のほうだったのではないか。どうやってこれから大人が責任を果たしていくかが問われていると思います。

（会場の防災意識についてのアンケート）

早川 階上中学の生徒の話から当時の中学生たちが活躍した話がありましたが。

佐藤 当時、翌日に卒業式を控えた中学 3 年生でした。中学でホームルームをしているとき、自分が生きてきた中で体験したことのないような大きな揺れでただごとではないと思いました。クラスのみんなで校舎の外にとりあえず避難して雪がちらつく中を待機しました。中学は山の上にあって津波の心配は全然ありませんでしたが、住民の人たちが中学に走って逃げてくるのを見ました。そのあとは体育館に避難しましたが、その後もずっと余震が続き、まちで一番生徒数の多い中学で、ほとんどパニック状態でした。先生方も生徒だけではなくて避難してきた住民の対応もしなければならず、上級生だった私たちが下級生の世話をしたり、率先して情報収集を行いました。寒かったので、体育館に避難してきた人たちに、男子生徒は自分の上着を脱いで貸したり、学校の中の使える石油ストーブをかき集めて暖を取らせてあげたり、柔道場の畳をはがしてけがをした人たちの寝台をつくったり、混乱する状況で中学生の私たちはすごく動けていたのではないかと思います。

早川 助けられる側から助ける側に回った、その決断はどうしてできたと思いますか。

佐藤 南三陸町はチリ地震津波の経験から防災意識が高く、毎年大きな避難訓練を町民全体で行っています。地震の仕組み、応急処置など防災教育をしっかり受けていたので、その経験が活かされたと思います。

保田 仙台市青葉山の東北大の 13 階建の建物の 11 階にある研究室で被災しました。仕事柄、周りの棚などは全部固定していましたが、ついたてなどは倒れるというより飛んでいく感じの揺れでした。全員けがもなく避難することができましたが、東京に出張中の上司と連絡が取れず困りました。解散命令が出て、岩沼市に住む娘が幼い 2 人の子どもを抱え、その夫は消防士で災害時にはすぐ出動命令が出て不在となるので心配でした。その日はどこにいるかわからず、翌日娘のアパート、娘婿の車などあちこちに連絡先のメモを貼っていましたが、その後嫁ぎ先の実家でお互い無事を確認できました。そこでみんな一緒に暮らしたほうがいろいろ都合がよいと判断しました。1 個の懐中電灯も 1 人でも 5 人でも照らすことができますし、お互いに知恵の共有をしたことがとても有効でした。みんなが集まることでそれぞれできることがあり役割分担をして急場をしのぎました。

早川 共助、一つのものを分け合いながら使うことでそれぞれ助け合うことができたということですね。エピソード的な話として、東大地震研で、地震のあと専門家の集団にもかかわらず建物の中で固まっていた。自分の職場から動くことができず、どうしたらよいのかわからなかった。外からこの建物は危ないから外に出ろと言われてハッとわれに返ってぞろぞろと避難してきたという話があります。ことほどさように頭ではわかっていても、いざというときに動けないことがありますね。

楠本 仕事柄、土砂災害、地滑りの災害現場に連れて行かれて、「どうでしょうか」とまず聞かれますが、毎日ずっと見ているわけではなく初めて見るところで、すぐにはわからないというのが正直なところです。やはり住んでいる人はいままでどういうことが起こってきたかという伝承、おじいさんやもっと上の人たちの体験を語り継ぐことがとても大事だと思います。

山中 渋谷区の防災に対する取組みの一つの大きな柱が、地域防災力の強化で、いわゆる自助につながります。基本は、準備、備えを常日頃から行うことです。渋谷区では家具転倒防止の助成、木造の家屋に対する耐震診断を行いながら準備、備えの啓発を行い、防災意識を高めています。

共助に関しては、災害時一番頼りになるのは近隣の顔見知り、町会の方ではないかと思います。渋谷区では 105 町会で自主防災組織をつくり、防災用品、災害時の要援護者の名簿の整理を行い、地元の民生委員、町会の方にリストを渡して、発災時には駆けつけて確認を行う取組みをしています。公助に関しては、一番のポイントは初期対応で、2 年前に渋谷ヒカリエの 8 階に防災センターを設置し、365 日 24 時間職員を配置して体制を整えています。初期対応では情報収集が生命線になると思いますので、ヒカリエの高所カメラなどを使いながら、特に火災などの発災時の対応を行うことにしています。自助、共助、公助の三つの柱がバランスよく相互の連携することで防災力が高まるのではないかと思っています。

小野寺 公助の話が出ましたが、災害の種類にもよりますが、公助はまずあてにできないと思ったほうがいい。われわれも 1 週間ぐらいは連絡が取れず指示もありませんでした。各学校の校長がそれぞれ判断をして、みんなで命を守る活動をしました。私自身動くことができず、約 1 週間家族と連絡が取れませんでした。

大震災が夜だったら被害はもっと大きかったと思います。階上中学は高台にあったので、学校にいた生徒たちは助かりました。夜家にいたらどうだったか。だから自分のこととしてとらえています。家族や自分のこととして動くためには、その家の柱、リーダーが必要です。おとうさん、おじいさん、そのリーダーがしっかり先を見据えて方向性を示さないと大変なことになる可能性が日本中どこにでもあるのです。

早川 リーダーが必要。将来のリーダーとなるのは私たちということですね。

金芳 大災害のときには、普段からやっていることでないと乗り切れない。普段の行動が非常時に役立ちます。常にそうした行いを心がけるおやじになることが一番大事だと思います。

早川 言行一致、実行する、ここは心に刻みつけておかないとできないことではないかと思います。

寺澤 自助、共助、公助の視点からいくと自助が7割、共助が2割、公助が1割で、ほとんど自分の身は自分で守るしかありません。地域で活動していて、いま共助もままならないと感じます。いま町会、自治会で活動の主体は、ほとんどが助けられる側の人です。おやじ、おふくろ、動ける人が普段からしっかりコミュニケーンを取り、実際に活動できる体制づくりを進めていきたいと思います。

早川 今日は防災の話でおやじ日本が開催されていますが、おやじ日本が日ごろ活動しているのは、防災だけではありません。その活動がトータルでその地域と連携がとれるということではないか。防災というだけでは、地域との結びつきもなかなか難しいのではないかと思います。そしておやじたちの役割は、これからリーダーになる若い人たちを育てることではないかとじわじわ感じ始めています。

2番目のテーマは、家庭でできること、地域でできることについてです。

保田 災害も先ほど地震、津波、火災などいろいろのかたちがあって、先ほど楠本さんがおっしゃったように何のときに何をするのかということを知ることが一番大事です。また災害は日本だけではなく世界中で多発しています。私は減災ポケット「結」という防災ハンカチをつくりました。意識は常に持ち歩かないと意味がないと思います。読んだときにわかった気になっただけではいけない。さまざまな対処をずっと考え続けなければいけません。

これは日本語バージョンで、楽しく見られるように工夫しています。防災、減災も本人がわがこととしてとらえて自分で取組まないと長続きしないし、発展もしていきません。この「結」から家族会議を始め、またこれをコミュニケーションのツールとして使っていただきたいと思います。共通の課題として、災害時には日ごろからその前段階の準備、備えがなければ対処できません。皆さんは今日いろいろな資料を持って帰って、今日から家族会議を開いて家族なりの役割分担、対策をしてほしいと思います。

早川 その情報のミソをちょっとご紹介ください。

保田 「結」には東日本大震災の知恵が入っています。どういうものが必要か、どういう備えが必要かを分けて書いてある。あと絶対パニックにならないでねとか、子どもさんのイラスト付きで書いてあります。

早川 今日から使えるということです。ほかのパネリストの方、備えておくことの必要性などについてご意見はありませんか。

楠本 先ほど小野寺さんからお話があった、公助は初め期待はできないということを覚えておいてほしい。本当に必要なときには行政は手が回りません。また、たとえば土砂災害が起こり復旧工事をすると、もう安心だと地元の人は思ってしまうが、でもその工事はある雨に対しては大丈夫でもそれを超えてしまったらだめになる。だから工事をしたから絶対大丈夫ということはないので、何か異状はないか、常に気にしてくださいと現場で話しています。そういうことを大人が覚えて、伝えていくことが重要なのではないかと思います。

昔は大がかりな工事ができなかったので、雨が降ると危ないぞとみんな避難していましたが、今回の3・11の防潮堤もそうですが、土木工事をやるともう大丈夫というのが一番怖いと思います。父親は家庭の柱、リーダーにならなくてはならないというお話もありましたが、ぜひそういう責任を持っていただきたいと思います。宮城県山元町の中学校の校長先生にうかがった話で、避難所で中学生はよく働いてくれました、その次にお年寄りでした、一番何もしなかったのは、親ですと言われました。それぐらい意識が低い。先ほど階上中学の生徒さんから「ストップ・ザ・無関心」という言葉もありましたが、ぜひ命を守るために関心を持っていただきたいと思います。

早川 今日は基調講演で10則の話、地域で訓練をしておくことが大事という話がありましたが、では会場の皆さんが家に帰って、何を話したらいいのでしょうか。

小野寺 一言で言えば危機意識を持つことではないかと思います。本当に危機意識を持ち続けることは簡単なようで難しい。

早川 何より危機意識を持ってそこから議論をしなければいけないと思います。佐藤さんは自分の経験を語り継ぐ、語り部的な活動をしていますが、その思い、何をどうつないでいきたいと思っていますか。

佐藤 こんなに大きな震災を経験することはめったなことではないし自分の経験を財産だと思って、これからいつ起こるかわからない直下型地震、南海トラフ地震などで、また私たちのような悲しい出来事、悲しく思う人たちが少しでも減るように全国

の皆さんに意識を高めていただこうとこの活動を続けています。

若い人たちは自分で見たことなどを結構素直に語り伝えることができるので、実際経験していない人たちにもリアルに伝えられます。そこは若さからできることではないかと思っています。

早川 先ほど階上中学の生徒たちも言っていましたが、大人たちは逆に自分たちの経験が避難する気持ちを邪魔してしまうことがあって、自分が経験したのはここまでだったから、今度も大したことはないと言っているということがありましたが。

佐藤 南三陸町の人たちでも 60 歳以上の人はチリ津波の経験があって、そのときはここまでは来なかったから大丈夫だと言って家に残って犠牲になった方も多く、逆に体験していない人たちは避難する意識が強かったようです。

早川 そうした予断を持たないことがとても大事と感じました。　（会場ヒアリング）

早川 最後にパネリストの皆さんから今日はたくさんのお話を伺いましたが、これだけを持ち帰っていただきたいという一言ずつをお聞きしたいと思います。

山中 今日参加して非常によかったと改めて思いました。自助、共助、公助が 7 対 2 対 1 だというお話がありましたが、それぞれがレベルアップ、ボリュームアップすることで防災力が全体として高まっていくのではないかと思った次第です。渋谷区もいま 22 万の人たちの命と財産を守っていくために今後頑張っていきたいと思います。

佐藤 伝えたいことは、実際に経験した私たちの震災体験を他人事ととらえないで自分事としてとらえてほしいと思います。津波の話をされても都内の方には実感がないかもしれませんが、自分の地域を振り返ってみて、どんな災害が予想できるかをしっかりと考えていくことが大事だと思います。私も語り部をしていますが、階上中学の皆さんが率先して防災の訓練をしているように子どもたちには無限の可能性があります。でも子どもたちが最初からできるわけではなくて、人生経験のあるおやじ、おふくろの皆さんの力添えがないと子どもたちも成長しません。皆さんが持っているたくさんの技術を子どもたちに存分に教えてあげてほしいと思います。

金芳 佐藤さんの話を聞いて、私が大学で教えていたときに最後に言うのは、災害を乗り切るのはコミュニケーションとかネットワークと言われている。コミュニケーションの基本は困っている人のそばに寄り添うことだ。それを心にとめてほしい。避難所に行って手伝うときも、何か困っていることはありませんかと言うのは違うだろう。困っているから避難所に来られているのだ。だから状況を見て、私これをやっておきます。これが基本です。要するに思いやりだということを言い続けています。

小野寺 一時避難場所を階上中学校から各地区に変更しました。各地区の避難場所がここだということが明確になったため、普段から周囲の危険個所などを注意して見る人たちが増えるし、避難道も整備されてきた。また各地区でリーダーが出てきて、訓練なども長続きするようになる。気づいたことなどを伝え合ったりできることなど、さまざまなメリットが出てきたのでそうした。やはりこういうふうにしなければいけないということはないので、その地区に合った柔軟な防災を考えていく必要があるのではないかと思います。

保田 最後にポジティブな話をさせていただきたい。最近、フィリピン、タイ、ハワイなど過去に津波の災害を受けた地域に行ってよく言われることは、日本人はすばらしい、外国から見ると日本人はあんなにちゃんと忍耐強く列をつくって並び、暴動を起こすことなくちゃんと配給が来るのを待っている。ああいう力があるから私たちは応援できると。これを受援力と言います。それが日本にはあると言われました。それは私たちのプライド、誇りだと思います。それは何千年、何百年と災害列島で生きてきたわれわれの先祖から引き継いだ宝物だと思います。今後もきちんと持ち続けて誇りある民族として世界で防災、減災のリーダーとなってまたひどい被害を受ける国があれば、今度は私たちがちゃんとお助けしないといけないと思っています。

家族や地域のコミュニケーションということで、私も小学生に必ず言います。自分のことは自分でできる子になろう。高いレベルのことでなくていいから、自分のできる範囲でいいので、自分の力だけでやってみよう。一人ひとりがそうなれば、それが 20 人寄り、30 人寄り、100 人寄ればすごく強くなると思います。一つの学校が強くなれれば、その周りのコミュニティが強くなれる。私はそうやって下から押し上げる活動をこれからも続けていきたいと思います。おやじの会の皆さんには上のほうからいろいろな活動を広げていっていただければ、一つの大きな社会が安心で安全な社会に育っていくのではないかと思います。

楠本 今日は地質の観点からお話ししましたが、日本はどこにいても災害があって、災害から逃れられない。だから住んでいる土地をしっかり知っていただきたい。宮城県山元町の中学校の校長先生の話をしましたが、何で親が働かなかったかと聞いたら、いまの親の世代は一人遊び、ゲームの世代で、人とのかかわり方を知らないということでした。先ほどコミュニティの話がありましたが、ぜひ子どもさんと話していただいて、どんな災害の可能性があるのか考えて、大人から子どもに伝えていっていただきたいと思います。

寺澤 防災士としてまず自分の命は自分で守ることを訴えながら底辺を広げられるようにそれぞれ活動を続けていきたいと思います。また地域を変えるのはおやじ力ですから、今日のこの時間を意味あるようにするために、皆さんこれをきっかけに何か行動してください。そうすれば、本日のおやじ日本全国大会の意義があるかなと思います。

竹花 今日私どもがお配りした資料の中に大判のハンカチがあります。これはコミュニケーションフラッグと名付けているもので

す。保田先生がおつくりになった大判ハンカチを見て、おやじ日本でもそれに負けないものをつくってみようと検討しました。

このフラッグは二つの目的でつくっています。真ん中には「減災復興は多くの人の協力が必要です。でも本当にその時が来て当たり前が通用しなくなった時、何ができるでしょう？それが奪い合いでなく、ふとした手助けやあたたかい言葉でありますように。また、これを利用してわが家の防災・減災ストーリーを作ってみませんか」と書かれています。また耳の不自由な方のコミュニケーションになるようにとつくったものです。ここには漢字、ひらがななどが書いてありますが、この中には自分たちで必要な減災のストーリー、ここで家族が待ち合わせようとか、そういう必要な言葉が必ず入っています。家に帰ってご家族の皆さんと話し合ってください。これは持って帰って仕舞い込んではだめです。家の防災のさまざまな備品のところに貼って、それを毎日見て何か考えてください。

今日は本当に多くのことを学ばせていただきました。パネラーの方々には本当に感謝を申し上げます。私も助ける人にまではなかなかなれないかもしれませんが、足手まといにならないようにしたいと決意を固めた次第です。

早川いろいろな知恵を皆さんで共有していただければ、今日パネルを開いた甲斐があったと思います。長時間にわたりありがとうございました

スカイプご出演のご協力ありがとうございました。

『未来の防災戦士の育成』(抜粋)

気仙沼市立階上中学校
今野勝美校長先生

震災後の影響として、生徒の中には、仮設住宅や学区外から通学する者もおり、これまでの生活リズムや家庭学習環境に大きな影響を及ぼしました。また、大部分の保護者の職場が被災し失業したことから、就学援助の受給率が全校生徒の約半数にも上ったほか、転職や出稼ぎを余儀なくされた家庭もありました。住宅再建にあたっては，安全安心な土地を求め、学区外に建設し区域外通学する者も出てきました。震災前には13地区あった学区は、震災の影響で1地区が自治会を解散したことから、12地区に減少しました。

『未来の防災戦士の育成』をテーマに平成17年度から取り組んできた「防災教育」が東日本大震災時、在校生や卒業生たち一人ひとりの体と心に染みつき、避難所運営やボランティア活動などにおいてその成果が発揮されました。地域の方々からも当時の階中生及び卒業生たちの行動を高く評価されるとともに、これらの取組を地域にも取り入れていくことになりました。“階上地区防災教育推進委員会”の立ち上げです。地域の自治会や振興協議会、小学校や保育所など地域が一体になった防災教育活動です。この取組は、宮城県が推進している地域連携型の教育活動、いわゆる階上小学校在籍の防災主幹をコーディネーターとし、防災教育を核に据えた協働教育プラットフォーム事業へと発展できるものと考えます。

また、震災後、あらゆる方面から御支援いただいたことに感謝するとともに、今回の震災で学んだことをベースにブラッシュアップした「階上中防災教育」を役立てて欲しいという願いのもと、全国に発信しています。平成25年度においては、「青森県階上中学校との交流」、「鎌倉ジュニア　防災フォーラム」、「第2回階中生を神戸に招こう」、「全国生徒会サミット」、「岡山市操南中との交流会」に生徒代表が出席し、本校の防災に関する取組について発表するとともに意見交換を行いました。さらに、インドネシアで行われた「防災教育・心のサポート」に関する国際的なワークショップにも日本代表として参加し、各国の防災教育の在り方を学ぶことができました。今後も『未来の防災戦士の育成』をテーマに防災教育を継続的に実施していきたいと考えています。

↑スカイプ中継技術サポート
戸羽康幸教諭

SPECIAL THANKS

ご賛助ありがとうございます。

浅倉溢朗　飯田五郎　石田桂久　一越観光(株)　AYA交通(株)　(株)エンデバーツカコシ　尾崎毅　小川明人
開進交通(株)　学校給食用食品メーカー協会　木藤繁夫　三幸交通(株)　ジェイワイエスジャパン(株)
渋谷ビル経営者協会　昭栄自動車(株)　省東自動車(株)　杉並交通(株)　(公社)スコーレ家庭教育振興協会
すばる交通(株)　全国読売防犯協力会　大洋自動車交通(株)　高砂自動車(株)　つくば観光交通(株)　つばめ交通(有)
東亜交通(株)　東京協同タクシー(株)　(株)東京交通新聞社　東京コンドルタクシーグループ
東京都個人タクシー協同組合　(株)トレード・ラボ　中嶋雄一　中務嗣治郎　日興自動車(株)
日個連東京都交通共済協同組合　日個連東京都営業協同組合　西会計事務所　(株)交通総合センター　日日交通(株)
日本映像ソフト制作・販売倫理機構　パナソニックシステムネットワークス(株)　原田健司　日立自動車交通グループ
広島中央ロータリークラブ　日吉交通(株)　弁護士深澤直之　公認会計士・税理士福薗事務所　冨士自動車(株)
府中観光交通(株)　古野史郎　(株)ベーシック　保険情報サービス(株)　本州自動車(株)　マコト交通(株)　舛村英一
(株)宮本企画焼肉苑麻布十番店　山根健司　読売新聞東京本社　(株)リード　龍生自動車(株)　(五十音順)

新聞等にて大きく報道！

平成26年7月11日内外教育

■2014年（平成26年）7月11日　内外教育　第3種郵便物認可

防災は学校、地域ぐるみで

●「おやじ日本」第12回全国大会

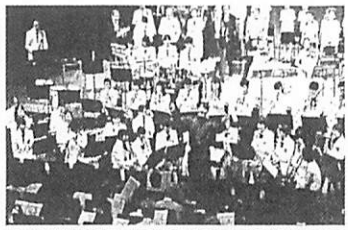
認定NPO法人「おやじ日本」（理事長・竹花豊東京都教育委員）は6月29日、東京都渋谷区の同区文化総合センター大和田で第12回全国大会を開催した。テーマは「災害国日本の親、おやじに問われていること」。東日本大震災（2011年3月）や阪神大震災（1995年1月）を教訓に、学校や地域で果たす役割について話し合った。

生徒が率先して行動

冒頭、神戸市の小学校6年生の吉本梨乃さんと、東京都の中学校2年生の戸澤采紀さんの2人が、東日本大震災の流木で作られた「震災バイオリン」を携え、渋谷区青少年吹奏楽団や広尾ジュニア合唱クラブとオープニングアトラクションを行い、NHKの東日本大震災復興支援ソング「花は咲く」を参加者全員で合唱した。

司会のNHK解説委員、早川信夫氏の問い掛けに答えて、竹花氏は「学校任せ、誰か任せでは子ども自分たちも守れない。そういう思いで、父親も母親もしっかり準備をしておかなければならない」と今回の企画趣旨を説明した。

続いて、2人が基調講演を行った。1人目は、前宮城県気仙沼市立階上中学校長で南三陸教育事務所在学青少年育成員の小野寺隆成氏の「助けられる人から、助ける人へ　大人を動かした中学生の取組～地域防災の推進」。東日本大震災では、階上地区の家屋の67%が津波被害に遭い、翌日に同中卒業を控えた3人を含む208人が死亡した。同地区出身の小野寺氏は、学校に避難する住民の現実を見ながら、「二度とこのような悲惨な状況を繰り返さないために、どうすべきかを考えなければならない」と思い立ち、時間を見つけては地区を回って話を聞いた。海の見える所に住んでいた人は、引き潮を見て津波を予想して避難できたが、海の見えない所では明治三陸地震津波（1896年）の被害があったにもかかわらず、多くの人が亡くなった。



吉本さん（後列2段目右から2人目）らの演奏で「花は咲く」を合唱する参加者

そこで「知る」「備える」「行動する」を視点に、学校を拠点とした地域防災を考えた。地区のリーダーとの話し合いを繰り返し、約700人が参加した総合防災訓練を実施。階上中の生徒も、生徒会が中心になって避難所設営訓練を行った。2012年12月に津波警報が発令された際には、生徒も住民も冷静に行動できたという。当日の模様を報じた新聞記事では「生徒に甘えてはいけない。大人こそ先導しなければ」という住民の声が紹介されていた。小野寺氏は「災害はいつ、どこで発生し、誰が被災するか分からない。自分は大丈夫だという『正常化の偏見』が最も危険であることは、東日本大震災で証明されている。訓練は命を守るために大事な取り組みであり、何度も繰り返すことが安全・安心につながる」と訴えた。

基調講演の2人目は、NPO法人「神戸の絆2005」専務理事の金芳外城雄氏の「巨大災害対応　おやじ10則」。阪神大震災当時、神戸市教委総務部長だった金芳氏は「『崩壊からの出発』が私たちの課題だった」と振り返りながら、教訓として①自立と共生②迅速・具体的に③防災福祉コミュニティー④社会関係資本の充実⑤生活再建⑥新しい公共⑦減災の知恵を⑧国難に備える⑨神戸は20年⑩強く　優しく――を示した。

金芳氏は「おやじの行動4原則」として、Speed＝迅速な行動▽Object＝具体的な対処▽Communication＝情報の共有▽Organization＝組織的対応――の頭文字を取って「SOCCOにある危機を乗り越える」ことを提案。「知性だけでは乗り越えられない。行動を伴うからこそ、おやじとしての価値を発揮する」とエールを送った。

生活再建のためには医、食、住、インフラ、教育が不可欠であることを指摘するとともに、公共、まちづくり、市民、民間の各セクターが力を合わせることが不可欠だと強調。最後に、米国の小説家チャンドラーの「強くなければ、生きていけない。優しくなければ、生きている資格がない」という一節を引きながら、「人の優しさこそがソーシャルキャピタル（社会関係資本）だ」と述べ、強さと優しさを備えた人間力の向上を訴えた。

教育の成果で「助ける側」に

この後、パネルディスカッションが行われた。登壇したのは小野寺、金芳両氏と、東北大学災害科学国際研究所助手の保田真理氏、渋谷区危機管理対策部防災計画課長の山中昌彦氏、宮城県南三陸町出身で慶應義塾大学1年生の佐藤遥子氏、農林水産省北陸農政局地震官の楠本岳志氏（おやじ日本防災担当）、元陸上自衛隊隊長の寺澤恵太郎氏（同）。早川氏がコーディネーター、竹花氏がアシスタントコーディネーターを務めた。

会場はインターネット中継で階上中とも結ばれ、校長の今野勝美氏、3年生の吉田奈々さんと三浦優花さん、卒業生である高校2年生の畠山大成君と高校1年生の柏岳斗君が現地から参加した。竹花氏から「中学生は助ける側に回ったと聞いている」と問い掛けられると、畠山君は「震災当時は寒かったので、自分たちの運動着や毛布を被災者に配った。生徒みんなの自主的な判断だった」と説明。小学校6年生だった柏君も「中学生の皆さんが積極的に誘導してくれて、パニック状態にはならなかった」と振り返った。吉田さんは「震災後に（神奈川県）鎌倉市の中学校と交流した時に『ストップ・ザ無関心』という言葉が出た。私たちが語り継いでいかなければならないと改めて感じた」と決意を語り、三浦さんは「震災があった時にどこに集まるかを話し合ったり、持っていくものを決めたりして、念のため準備をしておいた方がいい」と東京の参加者にアドバイスした。

続いて、一般財団法人防災検定協会の濱口和久氏（おやじ日本防災担当）が参加者に防災意識のアンケートを行いながら、世界の大都市の中でも東京・横浜や大阪・神戸・京都の各大都市圏は災害リスクが高いことを指摘した。

佐藤氏は大学でまちづくりや地域振興を学ぶ一方、被災地語り部としても活動している。中学3年生だった震災当時、自分たちが自主的に下級生の面倒を見ただけでなく、石油ストーブを集めて避難所となった体育館を暖めたり、柔道場から畳を運んで応急処置をする場所を設営したりしたことを振り返りながら、積極的に動けた理由として、南三陸町がチリ地震津波（1960年）などの経験から防災教育や訓練がしっかり行われていたことを挙げた。

山中氏が自助、共助、公助それぞれの必要性を解説すると、小野寺氏は外部と1週間連絡が取れなかった被災体験を踏まえて「公助はまず当てにはならないと思った方がいい。自分の事として動くのが大事だ」と指摘。保田氏も、東日本大震災では津波、阪神大震災では地震、関東大震災（1923年）では火災が教訓になったと整理した上で「防災・減災もわが事として取り組まないと長続きしない」と応じた。保田氏は大震災の教訓を忘れないため、風呂敷に減災の知識を印刷して被災時には頭巾や包帯、ロープ代わりと多様な用途に使える「減災ポケット『結』」を開発。小中学校の出前授業で活用していることを紹介した。

小野寺氏は「首都圏に直下型地震が来るかもしれないから、東京に来るのが嫌だった」と冗談めかして打ち明けながら、今も車のガソリンが半分になったら満タンにしていること、スリッパは履かないようにしていることなどを紹介し、常に危機意識を持つ必要性を強調した。

佐藤氏は「（今後起こることが予想される）南海トラフ地震などで悲しい思いをする人が減るよう、防災意識を高めてもらうために語り部の活動をしている。若い人は見たことを素直に伝えられるし、伝えた相手にもリアルに刺さる」とともに、「私たちの震災体験を人ごとせず『自分事』として受け止めてほしい」と訴えた。

（渡辺敦司＝教育ジャーナリスト）

■2014年（平成26年）7月11日　内外教育　第3種郵便物認可

「防災対策 父親も」

「おやじ日本」全国大会

全国の「おやじの会」の支援組織「NPO法人おやじ日本」の全国大会が29日、渋谷区内で開かれた。約500人が参加し、災害時の父親の役割を議論した＝写真＝。

基調講演では、東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市立階上中前校長の小野寺隆成さんが、「子供を守るには学校の災害教育だけでは不十分。家庭や地域で父親が本気になって防災に取り組んでほしい」と訴えた。パネルディスカッションには同校の生徒らもネット電話で参加。被災経験をもとに「家族内で、日頃から防災意識を高めておくことが大切」などとの意見が出た。

同法人の竹花豊理事長は「父親が自主的に備えることで地域や家族の安全につながる」と話した。

「おやじ日本」全国大会

全国の「おやじの会」を支援する「NPO法人おやじ日本」が29日、東京都内で全国大会を開催する。今回のテーマは「災害国日本の親、おやじに問われていること」で、東日本大震災で被災した宮城県の子供たちと意見を交わす。

当日は、同県気仙沼市立階上（はしかみ）中の前校長、小野寺隆成さんが、防災教育について基調講演を行い、当時、生徒だった4人とインターネット電話で対談する。震災の際の流木で作られたバイオリンの演奏や、おやじ日本合唱団のメンバー約20人による復興支援ソング「花は咲く」の合唱もある。

午後1時25分から、渋谷区文化総合センター大和田・さくらホールで。定員500人。資料代500円。問い合わせはおやじ日本（03・3462・7113）へ。

↑平成26年6月24日読売新聞

平成26年6月30日読売新聞→

オープニングアトラクション

昨年に引き続き渋谷区内小・中学校に在籍する子どもたちを中心に編成された「渋谷区青少年吹奏楽団」(出演者約50名)による力強いファンファーレを合図に、大会はスタート。「一般財団法人Classic for Japan」のご協力を得て、東日本大震災被災者支援のため製作されたヴァイオリンを小学6年生吉本梨乃さんと中学2年生戸澤采紀さんが演奏。オープニングフィナーレでは、大会参加者全員が「花は咲く」(NHK「明日へ－支え合おう－」東日本大震災復興支援ソング)を復興への祈りを込めて大合唱。その後会場全員で東日本大震災で被災された多くの方々への想いを込め、黙祷を捧げました。

←会場全体で「花は咲く」を合唱。広尾ジュニア合唱クラブの皆さまとおやじ日本合唱団

↑東日本大震災で被災された方々を想い、会場全体で黙祷を捧げました。

↑TSUNAMIヴァイオリンの演奏
左から　吉本梨乃さん(小6)　戸澤采紀さん(中2)

開会前の打合せ

出演者全員で控え室にて打合せ↓

↓スカイプ中継テスト

大会終了後の交流会では… ご尽力頂いた多くの方々に心からの感謝を込めて

→渋谷区区長桑原敏武様よりご挨拶を賜りました。

↑左から「Classic for Japan」事務局長大庭泰三様、ヴァイオリニスト戸澤采紀さん、吉本梨乃さん、お母様方

大会スタッフ

↑全国各地のおやじの会から助っ人が‥

おやじ日本が誇る舞台・ITチーム今年も大活躍！

←想定外は想定内が合言葉（？）「謙虚な姿勢と共感」がチームカラー

～広がれ！おやじネットワーク～
第6回おやじ日本広島大会開催！

里山の手入れを通して、自然に関わることの大切さを伝え、親子の絆を深める活動に取り組んでいる「おやじ日本広島」では、「日本の森林を再生していこう！おやじの森仕事」をテーマに、4月6日（日）午前9時30分から、おやじ日本広島大会を平田観光農園（三次市上田町）で開催。

当日は、雨、雪、霰が時折降る中、園内の森林で大人と子どもが一緒に雑木の間伐や遊歩道、ツリーハウスの整備を行い、体験活動を通して子どもたちに大人の思いを伝える実践的な大会を実施。

天候状況により、ツリーハウスで予定されていた山小屋風（？）野点はログハウスに場所を変えて準備され、参加者は趣深い一盌に作業の疲れを忘れた様子。

昼食には、おやじ日本広島特製「いなりずし」や猪肉鍋・バーベキュー、フルーツカレー、事務局お手製のお菓子などが準備され、和やかな昼食会に。

また、午後1時より、「日本の土曜日を変える」と題して、竹花豊おやじ日本理事長が講演し、参加者は熱心に耳を傾けていました。

創立20周年を迎えた世田谷区立等々力小学校おやじの会より

等々力小学校おやじの会代表　和田圭司

等々力おやじの会は今年で20周年を迎えました。世田谷区立等々力小学校のお父さんとOBを中心に、子供と地域のために毎月活発に活動をしています。主な活動の一部を以下にご紹介します。

◆7月「夏祭り・盆おどり大会」 PTAのお母さんが企画した夏祭りに、ラムネ販売、安全パトロール、太鼓叩き・やぐら・灯籠設置などで協力しています。夏休みのスタートとして、毎年、子供たちが、とても楽しみにしている行事です。

↑2013年「アドベンチャーin・多摩川いかだ下り」

←現役のおやじと元おやじ、学校、PTA、地域が一体となって活動。二十周年祝賀会にて。

◆8月「いかだ下り」 世田谷区が主催する「アドベンチャーin 多摩川・いかだ下り」に毎年参加をしています。お父さんと子供達の手作り「いかだ」でデザインとスピードを競います。今年（平成26年）の出艇数は、なんと5艇！子供と先生・校長先生含め総勢25人がいかだに乗って、入賞を目指します。8月最終週、夏休み最後の貴重な思い出になっています。

そのほか、玉川神社・神輿かつぎ（9月）、約100キロのお餅を、子供たちと一緒につく「餅つき大会」（2月）など、休む暇もなく活発に活動をしています。

この先、30年、40年「子供たちに楽しさを、自分たちも楽しく」を基本により活発に活動し、今後は、おやじの会の横のつながりも大切にしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

今、おやじ日本では

★iS運動　有識者を招きスマホ問題勉強会を開始

平成27年の全国大会では、スマホ問題について議論する予定です。第1回の勉強会を7月14日（月）に実施。第2回勉強会は9月26日（金）に実施予定。

★未来教室　50校実施に向け活動中！

日時　平成26年9月6日（土）11:45～12:35
学校名　目黒区立東山中学校
協力企業　パナソニック㈱、ワタミ㈱、㈱ゼンショーホールディングス、㈱JTBコーポレートセールス、㈱幻冬舎、㈱三井住友銀行、東日本旅客鉄道㈱、㈱竹中土木、㈱エフエム東京、ヤマト運輸㈱

日時　平成26年9月10日（水）13:30～15:20
学校名　豊島区立駒込中学校
協力企業　リーガロイヤルホテル東京

日時　平成26年9月16日（月）13:20～15:10
学校名　八王子市立第七中学校
協力企業　東日本旅客鉄道㈱、㈱幻冬舎、ヤマト運輸㈱

★防災教室

第1回防災教室　11月12日（水）
学校名　渋谷区立原宿外苑中学校

日時　平成26年9月16日（月）13:30～15:20
学校名　渋谷区立原宿外苑中学校
協力企業　パナソニック㈱、㈱明治、読売新聞東京本社

日時　平成26年9月18日（木）13:30～15:05
学校名　渋谷区立笹塚小学校
協力企業　㈱竹中土木、ヤマト運輸㈱

日時　平成26年9月25日（木）10:45～15:15
学校名　世田谷区立三軒茶屋小学校
協力企業　読売新聞東京本社

日時　平成26年9月26日（金）13:30～15:20
学校名　渋谷区立原宿外苑中学校
協力企業　リーガロイヤルホテル東京

◇◆ 活動報告 ◆◇

平成25年度

☆第4回定例理事会　3月29日(土)

審議事項
平成26年度事業計画について
平成26年度事業予算について
報告事項
第12回全国大会について
第6回おやじ日本広島大会について　他

☆運営委員会

1月度運営委員会　1月19日(日)
第4回定例理事会　第12回全国大会　防災教室　忘年会及び決算　新年互礼会及び決算　会費納入状況　未来教室　iS運動　他団体連携　ニュースレター発行　他

2月度運営委員会　2月14日(金)
第12回全国大会　防災教室　未来教室　iS運動　83運動　会費納入状況　愛知おやじの会研修会　ちはら台市民会議主催研修会　第6回おやじ日本広島大会　他

3月度運営委員会　3月8(土)
第12回全国大会　防災教室　平成25年度事業報告　平成25年度決算メモ　平成26年度事業計画　平成26年度予算　未来教室　iS運動　83運動　会費納入状況　第6回おやじ日本広島大会　他

第2回3月度運営委員会　3月29(土)
第4回定例理事会　平成25年度事業報告　平成25年度決算メモ　未来教室　防災教室　iS運動　83運動　会費納入状況　第6回おやじ日本広島大会　第12回全国大会　他

☆第12回全国大会実行委員会

第1回実行委員会　12月15日(日)
第2回実行委員会　1月19日(土)
第3回実行委員会　2月14日(金)
第4回実行委員会　3月8日(土)
第5回実行委員会　3月29日(土)

☆第12回全国大会舞台・IT技術チーム打合せ会

第1回3月8日(土)
第2回3月15日(土)
第3回3月29日(土)

平成26年度

☆総会　6月29日(日)
於　渋谷区文化総合センター大和田4階　大練習室

☆第1回定例理事会　6月14日(土)

審議事項
平成25年度事業報告について
平成25年度決算報告について
理事選任について
監事候補について
総会議案について
報告事項
平成26年度正会員名簿について
平成26年度事務局職員について
第12回全国大会について

☆運営委員会

4月度運営委員会　4月23日(水)
未来教室　防災教室　iS運動　83運動　おやじ日本広島大会　平成26年度正会員名簿　平成26年度事務局職員　第12回全国大会　他

5月度運営委員会　5月17日(土)
未来教室　防災教室　iS運動　83運動　平成26年度年会費納入　平成26年度賛助協力　平成25年度事業報告　平成25年度決算報告　平成26年度理事・監事選出　平成26年度総会　第12回全国大会　他

6月度運営委員会　6月14日(土)
平成26年度第1回定例理事会報告　平成26年度通常総会　平成25年度国税庁報告　未来教室　防災教室　iS運動　83運動　第13回全国大会日程　第12回全国大会　他

7月度運営委員会　7月26日(土)
第12回全国大会報告　大会決算　未来教室　防災教室　iS運動・スマホ問題　83運動　第13回全国大会　他

☆第12回全国大会実行委員会

第6回実行委員会　4月23日(水)
第7回実行委員会　5月17日(土)
第8回実行委員会　6月14日(土)

☆第12回全国大会舞台・IT技術チーム打合せ会

第4回4月20日(日)
第5回5月3日(祝)
第6回5月17日(土)
第7回5月28日(水)
第8回6月3日(火)
第9回6月9日(月)
第10回6月14日(土)
報告会7月21日(祝)

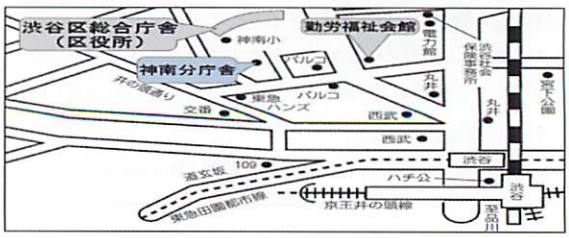
おやじ日本の会議・事業日程はホームページに掲載しています。是非ホームページをご活用下さい。
アドレス:http://oyaji-nippon.org/

賛助・寄附のお願い

おやじ日本は活動の趣旨に賛同して下さる方々に賛助・寄附を募っております。皆さまからのご理解とご支援を頂きたく、お願い申し上げます。おやじ日本は、国税庁から認定NPO法人(国税庁課法11－86)として認定されていますので、おやじ日本に対して寄附または贈与された方につきましては、所得税、法人税または相続税上の課税について、寄付金控除等の特例が適応されます。賛助のご協力を頂ける方は下記振込先にご入金をお願い申し上げます。

みずほ銀行新橋中央支店　普通2059554　口座名　おやじ日本　　ゆうちょ銀行　00150-9-631618　口座名　おやじ日本

必要とされる方には領収証を発行させて頂きます。ご理解、ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

【発行】　認定特定非営利活動法人おやじ日本
住所　〒150-0042　渋谷区宇田川町5番2号　渋谷区役所神南分庁舎3階
電話&ファクス　03－3462－7113
ホームページ　http://oyaji-nippon.org/
事務局担当理事　小山　洋子　desk@oyaji-nippon.org
編集協力　丸山容子　京須和恵　　写真提供　小川写真館　加藤多津生

ここに記載の内容は全て無断転載を禁じます